

満洲字概説 —有圈点満洲字篇—

早田輝洋

(A Manual of the Manchu Script with Dots and Circles)

Teruhiro HAYATA

(pp.129-167)

Contribution to the Studies for Eurasian Languages series vol.15

『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』
Native and Loan in Turkic Languages

九州大学人文科学研究院言語学研究室 Department of Linguistics, Graduate School of
Kyushu University / ユーラシア言語研究コンソーシアム The Consortium for Studies of
Eurasian Languages

2009 March

ISBN 978-4-903875-18-7

満洲字概説——有圈点満洲字篇——

早田 輝洋

序

本稿は『満洲語概論』の「文字篇」として書き始めたが、内容も長くなり「音韻篇」の完成にも時間が掛かることであり、ひとまず『満洲字概説——有圈点満洲字篇——』として纏めることにした。最初、服部四郎『蒙古字入門』（1946）に倣って『満洲字入門』としたのであるが、これは「入門」用の書き方ではない。入門のためには学習しやすいように、基本的な所から練習問題を解きながら次第に稀少な例に進むべきである。それは別途編纂しなければならない。本稿にも、僅かながらも初学者向けの解説を挿入し、授業で配布した学習用の附図を最後に加えた。

文字の概説としての書き方には、上記の服部(1946)のものと、Захаровъ(1879:1~; 特に19-46の表)のものが先ず考えられる。Захаровъの書き方は、満洲字を(音素文字でなく)音節文字として¹⁾解説し、なかなか好いのであるが、今回は服部(1946)・池上(1947)の単音文字的解説に倣い、さらにそれを拡大したものを作るように試みた。

目次

1. 文字と音	1
2. 音の概略	2
3. 各文字について	6
3.1. 母音字	6
3.2. 子音字	10
3.3. 漢語を表す字	18
4. 満洲字一覧表	22
5. 文字連続に関して	24
6. 曖昧な文字連続	26
7. 句読点	31
8. 母音字の次の母音字	31
9. 文字上の音節	32
10. 満洲字の転写法の問題	32
引用文献	35
附表	

1. 文字と音

文字は、その言語を知っていて、その言語を使っている者のためのものである。したがって、その言語の文字を論ずるためにはその音韻・文法・語彙を知らなければならないのであるが、満洲語は過去の言語であり、その音韻・文法・語彙を知るためには文字で表記された資料を基にしなければならない。文字を扱うためには先ず文字の転写法を決めなけれ

1) Sinor(1949)も同意見である。

ばならない。有圈点満洲字の転写法を決めてから、音韻体系を考察することになる。1599年に蒙古字で満洲語を表記するようになり、1632年に一層音韻を区別しやすいように改造した「有圈点満洲字」が当面の対象である。

有圈点満洲字と諸家の転写法については、筆者と意見・解釈の違いもあるが、『東洋語研究』第二号に載せられている池上(1947)が現在もっとも詳しいものであろう。現在日本で満洲字を知るために用いられている解説は、この池上(1947)、池上(1955:460-464)、これと本質的に等しい津曲(2002)であり、それぞれ便利である。しかし、それらには多少字形・字種に省略された所がある。それを補うためにも、筆者の考え方から新たに書いてみたいと思う。

満洲字は、いわゆる表音文字であるが、単音文字と音節文字との両方の性格を持っている。すなわち、文字の要素を単音に分解はできるが、その単音単位の要素は音節内の他の要素を参照しないと確定できないのである。清朝時代でも現代でも中国に於ける満洲語教育では音節単位で教え、西洋や日本では単音単位で教えるのが通常のようなのである。

2. 音の概略

音の議論の詳細は別稿に回すことにして、満洲語の音の概略を述べる。以下普通のローマ字は筆者の方式による満洲字の転写である。満洲字のローマ字転写には、現在広く採用されている方式を用いるのが好いか、自分の研究目的に合致したものを用いるのが好いか、という問題が出てくる。筆者は音韻について特に興味を持っている故、音声のみならず音韻としても区別されている文字を、満洲人が別の形の字を(有圈点文字として)作って用いているものは区別して表記したい、ということと、現実に満洲語文献をコンピューター処理するのに便利な表記法、ということから筆者の方式を用いることにする。一般に用いられている Möllendorff 式との違いは、外来語用の文字 (tulergi xergen 《外字》) 以外では (1) のように対応している。満洲字は頭位形(語頭に書かれる)で示す。

(1) 満洲字		Möllendorff 式	筆者の方式
ㄅ	[k]	k	k
ㄆ	[q]	k	q
ㄊ	[g]	g	g
ㄊ	[e]	g	G
ㄏ	[x]	h	x
ㄏ	[X]	h	X
ㄣ	[ʃ]	š	S
ㄨ	[u]	ü	v

筆者は、母音字の次の **d** 字は u で転写する。ただし直後の音節主音(CV の v)が **d** の場合は o で転写する。外字については【3.3.】参照。

なお満洲字の転写については10章でさらに述べる。

満洲字には、満洲語固有の音韻を表記するために用いられる文字と、非満洲語の音韻(ほとんど漢語)を表す「外字」tulergi xergen (tulergi「外」, xergen「文字」)がある。先ず満洲語固有の音から始める。文字上、6個の母音文字(2)が区別され、22個の子音字(5)が区別されているが、Möllendorffの転写では19個の子音字を区別するのみである。

(2) 母音文字	i	u
	e	v
	a	o

vはuの異音と考えられ、(3)のような母音体系となる。早田(2003)参照。

(3) 母音体系

高舌母音	i	e	u
非高舌母音		a	o

この5母音は、概略の「音声」としては文字(2)にほぼ対応する(4)のようなものだったと考えられる。

(4) 母音音声	i	y~u
	i~ɜ~ɾ~w	u~o
	e~ɛ~æ~a~ɑ	o~ø~œ~ɔ

非高舌母音は、中高と低の対立がなく、且つ前舌・後舌の対立も無い故、/a/と/o/の実現音声の中は可成り広いと思われる。/e/を θ で代表表記する向きもあるが、/e/と/o/が対立していない以上、適当とは考えられない。日本語の/e/も中舌と前舌の対立はなく一般に可成り中舌的であるが、これを θ で表すのは適当でない。

子音は文字上(5)のように区別されている

(5) 子音体系

	唇	歯	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂
閉鎖音	p b	t d		k g	q G
鼻音	m	n		ng	
震え音		r			
摩擦音	f	s	ʃ	x	X
破擦音			c j		
側面音		l			
半母音	w		y		

硬口蓋摩擦音のʃは、筆者はSで表記している。Möllendorff等の転写法では軟口蓋音と口蓋垂音とを区別していない、即ちk/q, g/G, x/Xは区別せず、それぞれk, g, hで転写している。またwは音韻論的考慮から半母音に入れたが、音声的には音節初頭音としては非共鳴音の摩擦音でありfの有声音であったと考えられる。

以下、蒙古字に関する服部(1946)に倣って個々の満洲字を解説する。服部(1946)に倣

った満洲字の解説と、諸家の転写法の紹介および自己の転写法の提案である池上(1947)も参考にさせて頂いた。転写法については第10章で述べる。

満洲字は縦書きで、行は左から右へ進む。本稿の満洲字は、いわゆる「有圈点満洲字」である。印刷体と手写体とを截然と分けることは出来ない。問題は印刷と手写との違いではない。上奏文など正式の文書では丁寧に書かれるのが当然であるが、勅命・勅命に類するものによって翻訳・出版されたものでも、例えば満文の『大遼国史』(順治3年=1646年)は、後代の整った書体——池上(1955:462-464)、それに基づく津曲(2002;18-23)に示されている字体——と較べれば、非常に手写的である。しかし、後代の手写体と言えるものとは違う。満文『三国志』(順治7年=1650年)の字体は一層丁寧であるが、後代の公文書の字体と較べれば手写体的とも言える。

本稿では有圈点満洲字の範囲内で、できるだけ、満洲語が第一言語である時代——順治・康熙の頃——ここでは順治の『満文大遼国史』から採取した文字を主たる資料として示す。表一に本稿で掲出する字体の主な出典の簡単な解説と文字見本を挙げよう。その原題等と見本文字(6)の各2行目、『武皇帝実録』のみ3行目)の転写・翻訳を(6)に示す。

(6)

『大遼国史』題簽 dailiyou gurun -i suduri / 版心 dailiyou -i bitxe

ijisXvn dasan -i ilaci aniya, 《順治3年》

『満文三国志』ilan gurun -i bitxe

ijisXvn dasan -i nadaci aniya, 《順治7年》

『満文詩經』版心 Si-ging ni bitxe

ijisXvn dasan -i juwan emuci aniya 《順治11年》

『武皇帝実録』題簽 daicin gurun -i taidzu XorongGo enduringge Xvwangdi yargiyan qouli
(松村2001:3によるが転写は筆者のものである)

soXon ulgiyan aniya. aniya biya de 《己亥正月》

『大清全書』daicing gurun -i youni bitxe

aniya biya 《正月》

『満文金瓶梅』gin-ping-mei bitxe

elxe taifin -i dexi nadaci aniya 《康熙47年》

『御製清文鑑』Xan -i araXa manju gisun -i buleku bitxe

elxe taifin -i dexi nadaci aniya 《康熙47年》

『清文彙書』manju isabuXa bitxe

aniya biya 《正月》

『御製增訂清文鑑』Xan -i araXa nonggime toqtobuXa manju gisun -i buleku bitxe

abqai wexiyexe Gvsin ningguci aniya 《乾隆36年》

『清文補遺』manju gisun be niyeceme isabuXa bitxe

aniyai enduri 《正月》

『シベ文三国志』ilan gurun -i bitxe

ijisXvn dasan -i nadaci aniya, 《順治7年》

表一

以上 (6)の他に (7)の文献から文字を採ることもある。

『シベ文三國志』	1985年	刊本	あるが、乾隆42(1777)年「欽定四庫全書薈要本」(精写本)による	
『清文補遺』	乾隆51(1786)年序	刊本	あるが、乾隆42(1777)年「欽定四庫全書薈要本」(精写本)による	
『御製増訂清文鑑』	乾隆36(1774)年の刊本で			
『清文彙書』	乾隆16(1751)年序	刊本		
『御製清文鑑』	康熙47(1708)年序	刊本		
『滿文金瓶梅』	康熙47(1708)年序	刊本		
『大清全書』	康熙22(1683)年序	刊本		
順治重修『武皇帝實錄』	順治12(1655)年	精写本		
『滿文詩經』	順治11(1654)年序	刊本		
『滿文三國志』	順治7(1650)年序	刊本		
『滿文大遼國史』	順治3(1646)年序	刊本		

(7)『使事紀略』(の満訳精写本) 康熙 8(1669)年遣使の報告書であるが満洲語訳はかなり後かも知れない。冒頭に taqvrān de genefi yabuXa baitai muru. となっている

『三譯総解』乾隆年間 朝鮮司訳院重刊

『漢清文鑑』乾隆年間 朝鮮司訳院刊

『満洲實録』乾隆 42(1777)年重刊の精写本を用いる

原題 manju -i yargiyan qouli

3. 各字について

満洲字は単音文字であるが、(文字上の)音節内の位置によって「字価」が違ってくるとい意味で音節文字的でもある。ほぼ単語単位に続けて書きスペースを置く。同一の音でも語頭・語中・語末で字形の違う字が可成りある。服部(1946)に倣い、それぞれ、「頭位形」「中位形」「末位形」と呼ぶ。それは単語中の位置であり、音節中の位置ではない。母音によっては「単音節語末形」と「多音節語末形」とで別の形をとる文字もある。母音一個だけからなる単語は頭位形に近いが同じとは言えない形で表記される。この形を「独立形」と呼ぶ。転写ローマ字は原則として筆者の方式である。適宜イタリックで Möllendorff 式等を記す。[]の中に概略の音声を IPA によって示す。

3.1. 母音字

【一】a の字 [a]

頭位形	中位形	末位形	独立形
		(ア) (イ)	

以上のうち、末位形の(イ)は b p k; g; x; (Möllendorff 式 b p k' g' h') の字から続く場合に、(ア)はその他の字から続く場合に用いられる。

【二】e の字 [e]

頭位形	中位形	末位形	独立形
	(ア) (イ)	(ア) (イ) (ウ) (エ)	

独立形は『大清全書』からのもの。以上のうち、中位形の(イ)は t d k g x の字から続く場合に、(ア)はその他の字から続く場合に用いられる。

末位形(イ)は t d の字から続く場合に、(ウ)は b p の字から続く場合に、(エ)は k g x の字から続く場合に、(ア)はその他の字から続く場合に用いられる。

【三】iの字 [i]

頭位形	中位形	末位形	独立形
	(ア) (イ) (ウ)	(ア) (イ) (ウ) (エ)	(ア) (イ)
イ	イ イ イ	ウ イ エ	ウ

以上のうち中位形（ア）は子音字から続く場合に用いられ、（イ）（ウ）は母音字から続く場合に用いられるのが普通であるが、母音字 i から続く場合には（ア）が用いられる。

末位形（イ）（ウ）は b p k g x の字から続く場合に、（ア）はその他の字から続く場合に用いられる。

中位形（ウ）と末位形（ウ）は、筆者のしている範囲の文献では、朝鮮司訳院の『八歳児』『三譯総解』と現代錫伯文のすべてに於いてこの形で用いられているが、他の資料では、『大清全書』と『御製清文鑑』に少数見られる程度のものである。朝鮮司訳院のものでも『漢清文鑑』では、他の一般の清朝時代の文献と同様に、中位形も末位形も（イ）の形が用いられている。『大清全書』には、中位形（ウ）が、例えば eniyeingge, baingge, beyeingge 等の ingge の i に使われている例がある。eniye#i#ngge, ba#i#ngge, beye#i#ngge と分解すると、形式名詞 ngge に直接先行する属格助詞 i にこの形が使われているように見えるのであるが、そのような場合でありながら、中位形（イ）の形を使っている例もあるから、統一的とはいえない。

独立形は（ア）が本来のものであり、この字で書かれたものはすべて自立語——三人称人称代名詞 i, i で表される漢字形態素——であるのに対し、独立形（イ）は属格・具格助詞の表記にしか用いられない。これを筆者は「スペース+ -i」で表す。独立形（イ）の形の文字は、共時的には、末位形（ア）で表すべき所を、助詞の独立性を表すべくスペースを置いて離して表記したものと考えてよいと思われる。その場合、この（イ）の直前の字形は末位形になる。

末位形（エ）は実例が少ない。この（エ）の字は後に（12）にあるように『御製増訂清文鑑』の漢字注音に「伊」となっているから、I で表しておこう。これは母音字からしか続かない。康熙朝の『御製清文鑑』巻 20-37 丁裏に、ul nimaXa《飛び魚》がある（8）。

(8)

この単語は『御製清文鑑』の音引き索引 uxeri xeSen には、(ui でなく) u の中に入っている。また、『御製清文鑑』saifi《匙》の語釈の中に、geli kuil sembi《また kuil ともいう》(巻 16-4 丁裏)となっている kuil という単語がある。（9）

(9)

この単語は『滿和辞典』を始め多くの辞書に kuii の綴りで載せられている。

前者 ui nimaXa は乾隆朝の『御製増訂清文鑑』(1774)では、(10)のようになっている。

(10) ui nimaXa

漢字注音は、(10)に見るとおり[烏衣]の反切で示されている。音引き辞書の『清文補遺』(1786)では ui sere xergen の中に ui nimaXa の見出しで、「文鱈魚。舊曰 ui nimaXa 今改此」となっている(11)。

朝鮮司訳院の出版物には残念ながら載せられていない。

(11)

kuiI は乾隆朝の『御製増訂清文鑑』でもそれ以前と同様で(12)のようになっている。

(12)


漢字注音は、[枯烏]衣伊 となっている。朝鮮司訳院の『漢清文鑑』には、満洲字は示されていないが、ハングルで(13)のように表示されている。これは二音節的な[kui.i]である。

(13)

以上から考えられることは、康熙年間の(14)の初頭語は、二音節的な[u.i]であったと考えられるが、乾隆年間では一音節的な[ui]に変わったのであろう。

(14)






しかし、(15)は康熙・乾隆両時代を通じて[kui.i]と二音節的なものであった。即ち、母音


字から続く末位形(エ)  は成節的(syllabic)な i だったと考えられるのである。

(15) 

ローマ字転写としては、すくなくとも後者については、記述のとおり『満和辞典』を始め一般に *kuii* とされているが、*i u* に続く末位形【三】(ア)の文字連続をそれぞれ *ii ui* とする以上、*i u* に続く末位形【三】(エ)は区別して、成接的な *i* であるから、それぞれ *ii u.i* とでもしたい所である。しかし、句読点に用いられている「.」も問題であるから、最初の案のように *ii ui* としよう。そうすると康熙年間の《飛び魚》は *ui nimaXa*，《匙》は *kuii* ということになる。*i* 系の幾つかの文字連続は(16)のように区別される。

(16) 頭位形 中位形 独立形

		<i>il</i>	
		<i>ii</i>	この頭位形は文献によっては <i>ei</i> と区別できないことがある。「曖昧な文字連続」参照
		<i>i</i>	
		<i>-i</i>	(スペース + <i>i</i>)

筆者は末位形【三】(エ)  を、辞書以外にまだ見ていない。


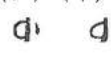
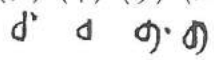

【四】oの字 [o]

頭位形	中位形	末位形	独立形
		(ア) (イ)	
	<i>d</i>	 	

b p k; g; x; (Möllendorff式 *b p k' g' h'*)の次に *o* の字が来る場合には、上とは違った中位形、末位形をとる。それについては *b p k; g; x;* の條(【十一】【十二】【二十九】【三十】【三十一】)参照。末位形は表記上の一音節語の場合は(ア)、表記上の多音節語の場合は(イ)の形をとる。

母音字に直接続く中位形と末位形(事実上(イ)しか来ない)とは、その次の(表記上の)音節に *o* が含まれない限り、*u* で転写すべきものと筆者は考えている。8章「母音の次の母音字」参照。

【五】u の字 [u]

頭位形	中位形	末位形	独立形
	(ア) (イ)	(ア) (イ) (ウ) (エ)	
			

b p k; g; x; の字の次に来る場合には、上とは違った中位形・末位形をとる。それについては b p k; g; x; の條（【十一】【十二】【二十二】【二十三】【二十四】）参照。


b p k; g; x; の字の次でない場合、中位形は（ア）であるが、t d から続く場合には（イ）の形を用いる。

b p k; g; x; の字の次でない場合、末位形は表記上の一音節語の場合は（ア）（イ）、表記上の多音節語の場合は（ウ）（エ）の形をとる。且つ、u の末位形は（ア）（ウ）であるが、t d から続く場合には（イ）（エ）の形が用いられる。

【六】v の字 [v] 頭位形は『御製清文鑑』、独立形は『清書指南』からのものである。

頭位形	中位形	末位形	独立形
			



b p k; g; x; の字から続く場合には、上と違った中位形・末位形をとる。それについては b p k; g; x; の條（【十一】【十二】【二十九】【三十】【三十一】）参照。

末位形・独立形の最後の画は、あまり後代のものでない文献では  のように垂直、あるいは垂直に近い形がよく見られる（例えば『大清全書』）。

この字のローマ字転写は、û ü ô û v 等様々である。筆者はデータ処理の為には単純な v を用いている。

3.2. 子音字

【七】n の字 [n]

頭位形	中位形	末位形
	(ア) (イ)	(ア) (イ)
		

中位形のうち、附点の（ア）は母音字の前に、無点の（イ）は子音字の前に使われるのが普通であるが、子音字の前に附点の（ア）を使った例も可成りある。順治朝の『滿文三國志』では種々の単語に見られる。anfu と anfula- は『大遼国史』『御製清文鑑』『清文集書』では附点の形が使われているが（17）、『武皇帝実録』（順治重修本）や『大清全書』では無点である。乾隆期の『御製増訂清文鑑』では問題の音節が anafu のように開音節になっている（18）。乾隆重修の『滿洲実録』が anafu になっているのは当然として、康熙時代に漢文から翻訳されたという『使事紀略』でも anafu になっているのは不思議である。

(17)  『大遼国史』  『御製清文鑑』  『清文集書』

(18)



『御製増訂清文鑑』

中位形で、子音字の前に附点の（ア）を使った例も可成りある、と上に書いたが、子音 n の前では必ず無点の（イ）が用いられている。『御製清文鑑』の例を示す (19)。

(19)



guwanni 《安閑とした》



gexennaqv 《卑陋な》

即ち、mn 連続も、少なくとも『御製清文鑑』には有るのであるが、『大遼国史』『滿文三
国志』『武皇帝実録』『使事紀略』『大清全書』『滿文金瓶梅』『滿洲実録』には見られない。

末位形としては、通常の場合（ア）が用いられる。（イ）は滿洲語にある単語と同じ綴り字の漢語を区別するために用いられている。滿洲語の《皇帝》と同綴りの漢語、例えば《漢》などを書くのに区別している。ローマ字転写としては筆者は n; を用いている（n'でも好いと思う）。即ち、

Xan 《皇帝》

Xan; 《漢》

san; 《山》



【八】q の字 [q]

頭位形

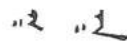
中位形

末位形（右は『御製清文鑑』）



(ア)

(イ)



中位形の（ア）は母音字の前に、（イ）は子音字の前に、用いられる。

【九】G の字 [g]

頭位形

中位形



【十】X の字 [x]

頭位形

中位形



【十一】 b の字 [b]

頭位形



中位形



末位形



この字に母音字が続く場合には特別の字形となる (20)。

	(20) 頭位形	中位形	末位形	独立形
ba				
be				
bi				
bo				
bu				

【十二】 p の字 [p]

頭位形



中位形



この字に母音字が続く場合には特別の字形となるが、b の字 (20) と全く並行的であるから、説明は省略する。

【十三】 s の字 [s]

頭位形



中位形



末位形



末位形 (ア) は『御製清文鑑』から、(イ) は『大清全書』からのものである。末位形のうち (ア) が普通であるが、『大清全書』の単音節見出しはすべて (イ) の形で、最後の画が短い。(ア) の最終画を縦にした感じである。

【十四】s(S)の字 [ʃ]

頭位形

(ア) (イ)

中位形

(ア) (イ)

普通は (ア) の形であるが、順治の『満文三國志』には (イ) の形も見られる。通常のローマ字転写はsであるが、筆者はデータ処理上、大文字のSを用いている。

【十五】tの字 [t]

頭位形

(ア) (イ)

中位形

(ア) (イ) (ウ)

末位形 (『大清全書』『御製清文鑑])

頭位形・中位形の (ア) は a i o の前に来る場合に、(イ) は e u v の前に来る場合に用いられる。

中位形の (ウ) は子音字の前に来る場合に用いられる。

同一子音連続は非常に限られているが、中位形 (ウ) の用いられている tt などは、t と d の文字上の区別の無かった時代の表記の名残かも知れない。

中位形 (イ) の書き方は (21) のようなのが普通らしい。

(21)

【十六】dの字 [d]

頭位形

(ア) (イ)

中位形

(ア) (イ)


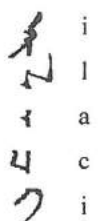
中位形 (イ) の書き順は (21) と同様で最後に点を打つ。

【十七】lの字 音節初頭[l], 音節末[l]


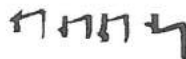

頭位形

中位形


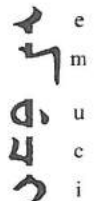
末位形

(22)  →  ilaci 『大遼国史』

【十八】 m の字 [m]

頭位形	中位形	末位形
(ア)	(ア)	(イ)
		




末位形は、『大清全書』などは (ア) の形で、後代になるほど (イ) の形になるようである。この (イ) は『清文彙書』からのもの。中位形最右端の実例:

(23)  →  emuci 『滿漢詩經』(『滿文詩經』の、おそらく康熙年間の滿漢合璧版)

(24) の形 (左二つ『大遼国史』, 右一つ『清文彙書』) は、中位形 m と末位形 a で、ma である。語末形の m ではない。






(24) 

ml 連続の場合も、蒙古字のような合字になることはない。

l にしても m にしても右側の  の左端と、対応の左側の  との上下位置は、一般に左側の  の方が下であるが、(23) のような例もある。(25) の 3 例はいずれも niylman ではなく、niyalma 《人》である。y の次には必ず母音が来る。

(25) 

【十九】 c の字 [ʧ]

頭位形	中位形
(ア) (イ)	(ア) (イ)
 	  

頭位形・中位形とも (ア) は比較的古い形、(イ) は比較的后期の形。

【二十】jの字 [ɟʃ]

頭位形

𠂇

中位形

(ア) (イ)

𠂇 𠂇

中位形のうち(ア)は清朝時代の形であるが、(イ)は現代錫伯語で用いられている形である。その結果、清朝時代の満洲字の ai 連続と現代錫伯字の aji 連続がよく似た形になっている(26)。

	清朝時代満洲語		現代錫伯語	
	頭位形	中位形	頭位形	中位形
ai …	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇 𠂇
aji …	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇

【二十一】yの字 [j]

頭位形

𠂇

中位形

𠂇 𠂇

【二十二】kの字 [k]

頭位形

𠂇 𠂇

中位形

(ア) (イ)

𠂇 𠂇 𠂇 𠂇

末位形

(ア) (イ)

𠂇 𠂇 𠂇

中位形(イ)左『使事紀略』, 右『大清全書』;

末位形(ア)左『滿文三國志』, 右『御製清文鑑』; (イ)『大清全書』

中位形・末位形の(ア)が普通の形であるが、(イ)は『大清全書』でしばしば、『使事紀略』(安南報告)ではすべてに亘って用いられている形である。

この字に母音が後続する場合には、(27)のような特別の字形になる。

(27)	頭位形	中位形	末位形	独立形	
ke	𠂇	𠂇 𠂇	𠂇	𠂇	
ki	𠂇 𠂇	𠂇 𠂇	𠂇	𠂇	右端『御製清文鑑』
ku	𠂇 𠂇	𠂇 𠂇	𠂇 𠂇	𠂇	

【二十三】gの字 [g]

頭位形

𠂇

中位形

𠂇

この字に母音字が続く場合には特別の字形となるが【二十二】の k の場合 (27) と全く並行的であるから、説明は省略する。

【二十四】x の字 [x]

頭位形	中位形
	

この字に母音字が続く場合には特別の字形となるが【二十二】の k, 【二十三】の g の場合 (27) と全く並行的であるから、説明は省略する。









k, g, x に v は一般には後続しないが, xv 連続の例が康熙の『御製清文鑑』, 乾隆の『御製増訂清文鑑』に見られる。(28)は『御製清文鑑』の例。

(28)

	nexv 《下女》		nexvji 《下女》
---	-----------	---	-------------

この単語の『御製増訂清文鑑』の漢字音注はそれぞれの (29) のとおりである：

(29)

	額納 烏祐		使婢				老婢				額納 烏祐 伊齋
nexv	[納額][祐烏]	nexvji	[納額][祐烏]	[齋伊]							

朝鮮司訳院の『漢清文鑑』には、満洲字 nexv に (30) のハングルが振られている (『漢清文鑑』では満文が有る場合、ハングルは簡略表記)：





(30)

녀
후

釈文中には、精密表記のハングルで nexvji が (31) のように書かれている：

(31)

녀
후
자

ただこのハングル表記も  は X でなくて x,  は単なる u でなくて v という満洲字の区別を示すに過ぎないように思われる。『漢清文鑑』の釈文中では、通常 Xv は  で、xu は  なのである。

『御製清文鑑』には kv 連続の例が見られる。(32) kiyān-kvñ は《乾坤》である。

(32)

kv の v と、qv Gv Xv の v とは音韻論上は別のものである。q G X の後の v は、k g x の後の u と同一の音素 /u/ であり、q G X の後ではそれら後部軟口蓋音（口蓋垂音）の非高舌性の影響で u がやや非高舌の [u] になったものの表記と考えられる。しかし、漢語に見られる kvn 《坤》、cvn 《春》等の v は、音節末子音の前で円唇から張唇になる母音を、[u] に似た音、むしろ /u/ に似て非なる音、として v の文字を使ったのであろう。

【二十五】 r の字

頭位形 中位形 末位形（左二つ『大清全書』、右二つ『御製清文鑑』）

末位形の最終画は垂直に近く短い。後代になるほど長くて左側に曲がってくるように思われる。

【二十六】 f の字 [f]

頭位形 中位形
 (ア) (イ) (ア) (イ)

頭位形・中位形ともに（ア）は a e が後続する場合に、（イ）はその他の母音が後続する場合に用いられる。


【二十七】 w の字 音節初頭では[u]、CV の次では[w]

頭位形 中位形

この字に後続する母音は a e だけである。中位形と言っても、あくまで文字上の第 2 音節——初頭音節の拗音の位置——に立つだけである。




【二十八】 ng の字 [ŋ]

中位形 末位形



中位形の最後の例は  manggi に用いられているものである。この manggi は現代シベ字としてなら maigi と読まれそうである。

中位形は子音字の前に来る場合である。母音字の前にこの字形が来た場合は ng でなく

て、n と k である。例えば:

- (33)  ninkimbi 《牡鹿が牝鹿を尋ねる》『御製清文鑑』
 (この単語は『御製清文鑑』によると  nirkimbi とも言う、とのことである。
 『御製清文鑑』には連用形 ninkime  の形も載っている)

子音連続 nr が nk になったのかどうか分からないし、nk の n の音韻論的な位置も分からない。漢語の [ŋk] 連続をスペース無しで続けて書いた例は、初期の文献には見られる (34)。

- (34)  『武皇帝実録』  『満洲実録』〈旅順口〉
 liuiSunk;au (lioišunk;ao) liui-Sun-keu (lioi-šun-keo)





上の k; は、次の「漢語を表す文字」の所で説明する。

3.3. 漢語を表す字 (tulergi xergen (外字))

【二十九】 k; の字 [k] 現代漢語拼音表記 <k>

頭位形 中位形
 

この字には a o しか後続しない。その場合、(35) の字形になる。

- (35) 頭位形 中位形 独立形
 k;a [ka]   (『大遼国史』)
 k;o [ko]  (『御製清文鑑』)  右端『御製清文鑑』

中位形・末位形の初画は上から続いてくる線を少し左に払い、第二画をそれに交叉させる。転写ローマ字の「;」は、a o の前にあっても、i e u の前にある場合と同様の前寄りの子音であることを表そうとしたものである。有気音や喉頭化音を表すものではない。

【三十】 g; の字 [g] 現代漢語拼音表記 <g>

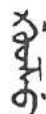
頭位形 中位形
 


この字には a o しか後続しない。その場合の字形は【二十九】の k; と全く並行的であるから、説明は省略する。


主に『満文三国志』からの実例を多少示す:

(36) 頭位形



 g;audzu (g'aodzu) 《高祖》 『満文三国志』



 g;oudzu (g'oodzu) 《高祖》 『大遼国史』

 g;ausY (g'aosy) 《告示》 『満文三国志』

 g;ouse (g'oose) 《告示》 『満文三国志』

中位形

  jug;oliyang 《諸葛亮》 『満文三国志』

  ug;o 《烏戈》 (国名) 『満文三国志』

【三十一】 x; の字 [x] 『大清全書』の見出しを示す。



有圈点満洲字として、k; g;と並行してg;の点を圈にした字が作られている。xにa oが後続した時のための文字であるが、少なくとも漢語にはXa Xoの音はあるが、xa xoの音は無く、満洲語はもとより漢語にもこの字の使われる例は無い。文字の紹介、辞書の見出し字として以外に、満洲語文献にこの文字の使われた例を筆者は知らない。

【三十二】 ts の字 [ts] 現代漢語拼音表記<c>

頭位形の左端のみ『大遼国史』, 他は『満文三国志』

頭位形

中位形

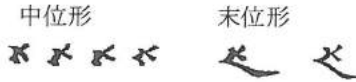
     

Möllendorffは転写母音字 a e i o u が後続する場合には ts' のように転写し、それ以外の場合には ts で転写するが、筆者としては、無声有気音子音は p t k q 等のように特に「l」な

り「;」なりを付けないものとして、【三十二】の子音字はすべて ts で転写する。

【三十三】 Y の字 [i] 現代漢語拼音表記 <ci><si> の <i>

漢語拼音字母 si [si], ci [tsʰi] の母音に当たる音を表記するために、満洲字では、【二】の e 字の附点を変形して縦に二個続けたような以下の字形を用いている。

中位形 末位形


漢字音に忠実でない満洲語的な発音では、この文字でなく、【二】の e の文字で書かれている。【三十】の《告示》の両例 (36) を比較されたい。

筆者の転写と Möllendorff の転写を並べて示す:

(37)					筆者	Möllendorff
	頭位形	中位形	末位形	独立形		
					sY	sy
					tsY	ts

【三十四】 dz の字 [dz] 現代漢語拼音表記 <z> 末位形・独立形の転写

	頭位形	中位形	(末位形	独立形)	筆者	Möllendorff
					dzY	dz

池上(1947:48-49)も問題にしているように、末位形・独立形の字形は【十三】s の末位形(ア)の最終画を左側に曲げた形(イ)と同じであり、ba(19)の最終画などとは明らかに違う。しかし、この末位形・独立形の表す漢語の「子」などの音を音韻論的に母音無しの音節としたくない故、筆者は、末位形・独立形では母音 Y を添えて dzY で転写する。

子音 s dz ts と母音部分との組み合わせ字形は不規則な所がある。字形見本として、(38)に時代は下るが『清文啓蒙』(雍正 8 年(1730)序) 卷一「滿漢十二字頭單字聯字指南」から採ったものを示す。



(38)	【sa	se	sY	so	su】
					
	【dza	dze	★ dzY	dzo	dzu】
					
	【tsa	tse	tsY	tso	tsu】
					

上に見るとおり、dzY のみ満洲字の母音部分の形が他と並行的でない。𡗗 という形が期待される所であるが、そのような字は満洲字に無い。頻度の高い dzY のために複雑な字形の 𡗗 から最初の 3 画だけを書いて 𡗗 にしたのか、と考えたくもなる。

今西(1959:64-65)もこの dzY を子音+母音の文字としているが、池上(1999:213)は、「子音字の一字とみるべきだらう。」²⁾すなわち子音だけの文字、としている。

実際『満文三国志』では、<子>など dzY の所の子音部分に (39)のように ts の形が 17% (76 例中 13 例) 用いられているが、母音部分の字形によって弁別に妨げはない。

(39) 曹子丹 tsou-tsY/dzY-dan (Möllendorff 式 ts'oo ts/dz dan)

	22-31-オ 4		19-8-2 オ 5
---	-----------	---	------------

しかし、少なくとも『満文三国志』では弁別に差し障りのある筈の tsai と dzai も (40) のように字形の混同があり、一般に ts と dz の書き分けは余り厳密でないようである。



(40) 蔡瑁 dzai/tsai-mou (Möllendorff 式 dzai/ts'ai moo)

	2-17 オ 7		100-10 ウ 5
---	----------	---	------------

【三十五】 z; の字 [z] 現代漢語拼音表記 <r> 例 (41)

頭位形

𡗗 𡗗 𡗗 𡗗

(41)		『大遼国史』 7-17 ウ 7 z; i-ben gurun -i ejen 《日本国の君主》		『大遼国史』 7-18 オ 1 z; i-ben oudzY gurun inu. 《日本は倭国である》
------	---	--	---	---

第一画は理想的には水平なのであろうが、『大遼国史』、特に『満文三国志』など可成り右下がりになっている字体が目立つ。勿論右上がりも無いではない。

2) なお、そのもとの文、池上(1947:49)も参照。

【三十六】c; の字 [tʂ] 現代漢語拼音表記<ch>

(末位形・独立形)

𠃑 𠃑 末位形・独立形の転写： c;i

【三十七】j; の字 [dʒ] 現代漢語拼音表記<zh>

(末位形・独立形)

𠃒 𠃒 末位形・独立形の転写： j;i

c; と j; は漢語の捲舌音を表すための字である。それぞれcの文字とjの文字に圈を附している。

これらの子音字に母音字iの続いた形は、当然c;i;j;iとすべきである。(早田 2008:32-33)でc;Y;j;Yとしたのは改めねばならない。




4. 満洲字一覧表

	頭位形	中位形	末位形	独立形
【一】 a	𠃑	𠃑	𠃑 𠃑	𠃑
【二】 e	𠃒	𠃒 𠃒	𠃒 𠃒 𠃒 𠃒	𠃒
【三】 i	𠃓	𠃓 𠃓 𠃓	𠃓 𠃓 𠃓	𠃓 𠃓
【四】 o	𠃔	𠃔	𠃔 𠃔	𠃔
【五】 u	𠃕	𠃕 𠃕	𠃕 𠃕 𠃕 𠃕	𠃕
【六】 v	𠃖	𠃖	𠃖	𠃖
【七】 n	𠃗	𠃗 𠃗	𠃗 𠃗	
【八】 q	𠃘	𠃘 𠃘	𠃘	
【九】 G	𠃙	𠃙		
【十】 X	𠃚	𠃚		
【十一】 b	𠃛	𠃛	𠃛	

- 【十二】 p ㄆ ㄆ
- 【十三】 s ㄙ ㄙ ㄙ ㄙ
- 【十四】 ʃ ㄕ ㄕ
- 【十五】 t ㄊ ㄊ ㄊ ㄊ ㄊ
- 【十六】 d ㄊ, ㄊ, ㄊ, ㄊ, ㄊ
- 【十七】 l ㄌ ㄌ ㄌ
- 【十八】 m ㄇ ㄇ ㄇ
- 【十九】 c ㄑ ㄑ
- 【二十】 j ㄐ ㄐ ㄐ
- 【二十一】 y ㄐ ㄐ
- 【二十二】 k ㄎ ㄎ ㄎ ㄎ ㄎ
- 【二十三】 g ㄎ ㄎ
- 【二十四】 x ㄎ ㄎ
- 【二十五】 r ㄎ ㄎ ㄎ
- 【二十六】 f ㄆ ㄆ ㄆ ㄆ
- 【二十七】 w ㄆ ㄆ
- 【二十八】 ng ㄎ ㄎ

tulergi xergen<外字>漢語等非滿洲語音を表すための文字

- 【二十九】 k; ㄎ ㄎ

【三十】 g; , 【三十一】 x; 【三十二】 ts  【三十三】 Y  【三十四】 dz    dzY  dzY【三十五】 z; 【三十六】 c;  c;i【三十七】 j;  j;i

5. 文字連続に関して

以上の母音字で注意すべきは、e の字を除いて、頭位形と中位形との相違点が基本的に
 一様である（頭位形では上に aleph が加わっている）ことである。

母音字 a と e の区別、o と u の区別は次のように子音との関連で知る必要がある。

(42) t d k; g; k g x に続く a と e の区別は次のようになる:

	頭	中	末	独
ta				
te				
da				
de				
k;a[ka]				
g;a[ga]				
ke[ke]				
ge[ge]				
xe[xe]				

(43) t d k; g; x; k g x 以外に続く a と e の区別, 例えば b n m では:

	頭	中	末	独
ba				
be				
na				
ne				
ma				
me				

(44) t d に続く o と u の区別

	頭	中	末	独
to				
tu				
do				
du				

(45) b p k; g; x; k g x と o u —— b g; g の例を挙げる。

	頭	中	末	独
bo				
bu				
g:o				
g u				

(46) w と f に続く母音 (頭位形で示す)

	清朝時代	現代錫伯語
fā		
fē		
fī		
fō		
fū		
wā		
wē		

6. 曖昧な文字連続

有圈点満洲字は蒙古字のような曖昧性はなく、転写法さえ確立されていれば一意的に転写できる、とは Sinor(1949:263) 始め屢々言われている所であるが正しくない。殿版など可成り書き分けの努力の見られる例も見られるが、それでも程度問題の域を出ない。若干の例を挙げよう。

(47) 独立形 a と en

『大清全書』 a	『大清全書』 en

(48) 頭位形 a と en

		『御製清文鑑』
		『大遼国史』
		『大遼国史』

(49) 独立形 i と ei

『大清全書』 i

『大清全書』 ei

(50) の『武皇帝実録』の eidu の ei と、(51) の『武皇帝実録』の eiju の ei は同形である。乾隆期の『満洲実録』(51) 右は漢語音のとおり i-jeu (Möllendorff 式 i jeo) と表記している。

(50) 「額亦都」(人名)。e (【二】の頭位形) に i (中位形【三】(イ)) の続いたもの。

eidu

『武皇帝実録』 2-25-3

eidu

『満洲実録』 3-96-3

(51) 「義州」(朝鮮地名)。『武皇帝実録』の形は2例とも朝鮮語音(現代語音 iju, ハングルで이주と書かれる)に依ったものであろう。

eiju

『武皇帝実録』 4-71-4 4-72-1

i-jeu (Möllendorff 式 i jeo)

『満洲実録』左端 7-214-7, 右端 7-217-1

中央は左端の満洲字に対応する蒙古文字 7-215-4,
右端の満洲字に対応する蒙古文字は無い

(52)

arqan

『大遼国史』

よく使われる単語であるが、単語を知らないと araqa とも読める。

(53) 独立形 eu と eb

『大清全書』 eu

『大清全書』 eb

(54) 頭位形 eu と o

これについては多少の説明を要する。eu (Möllendorff 式 eo) で始まる単語 euren 《塑像・位牌》と eulen 《房・家》は、その語頭の表記が徐々に o と区別し難くなったからか、後に vren, vlen 表記が出始め、康熙朝の『御製清文鑑』では vren, vlen 表記が規範になったようである。筆者の得ている使用状況は次のとおりである。〈〉内は度数。度数 1 の数値は記さない。

『滿文原檔』*	euran	oron? (この二つは無圏点) oren? (有圏点)	
『滿文大遼国史』1646			eulen
『滿文三国志』1650	euren? <6>		
順治重修『武皇帝実録』1655			vren<2>
『大清全書』**1683	euren	oren	
『滿漢同文全書』***1690	euren		
『滿文金瓶梅』1708	oren? <88>	olen?<3>	vren vlen
『御製清文鑑』****1708			vren vlen
『清文彙書』*****1751			vren vlen

* 『滿文老檔』の原檔。萬曆35年(1607)より崇禎9年(崇徳元年・1636)の記録。1969年臺北故宫博物院より『舊滿洲檔』の名で影印刊行され、2005年に同院により『滿文原檔』の名で再版が刊行された。本稿ではその再版本を用いた。1632年の滿洲文字改革以前は当然無圏点滿洲字であるが、それ以後も暫くは有圏点・無圏点が混在していて非常に面白い。『滿文原檔』の滿洲字については別稿を予定している。

** 『大清全書』は音引きの滿漢辞書であるゆえ、少なくとも初頭音は分類されている。euで始まる項目の中のeurenに「與oran(無圏点的表記)字互用宜酌之」((55)左端)となっている。

oで始まる項目の中のorenに「此字本在eu字頭内。」((55)右下)とある。

*** 『滿漢同文全書』音引きの滿漢辞書。euで始まる項目の中にeurenがある。

**** 『御製清文鑑』音引き索引で、vrenとvlenはuの中の最後の2語である。

***** 『清文彙書』音引きの滿漢辞書。vrenとvlenはuとurの間のvの中にある。

上に見るとおり、eu始まりよりもv始まりの方が後代のようなのである。『滿文金瓶梅』でもo始まり(eu始まりではないであろう)91例に対してv始まりは僅かに2例であり、『御製清文鑑』の權威によりv始まりが規範になったように思われる。ただ、順治重修『武皇帝実録』1655(今西1967による)に既にvrenが2例あるのは奇異であるが、今の所よく分からない。

問題の単語がo始まりでなく、eu(Möl. eo)であることの実例は、音引きで分類されている『大清全書』(1683)と『滿漢同文全書』(1690)である。その全例を(55)(56)に挙げる。

(55)

神像。尸位。木偶人。
與。是。字。互。用。宜。酌。之。

『大清全書』
卷二・十五丁表・第四行
【eu の項目】

『大清全書』
卷二・十五丁表・第五行
【eu の項目】

此字本在 eu 字頭内。
尸位。神主。辰。衣包。

『大清全書』
卷二・四十四丁裏・第四行
【o の項目】

(55) 右下「此字本在 eu 字頭内」という以上は、本は euren だったというのであろう。

(56)

『滿漢同文全書』(1690)
卷一・十五丁表・第四—五行
【eu の項目】

eu と o との違いは、前者は e と o との間が大きく空いていて、後者はその間が狭い。そのことを承知の上で音で分類されていない資料の例を見てみよう。まず『滿文原檔』(57)の左の2例は無圏点字である。

(57) 『滿文原檔』

天命4年(1619)10月
の記事 尺字档
太祖 第1冊 309頁

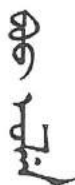
天命11年(1626)
8月の記事 宙字档
太祖 第3冊 54頁

崇徳元年
(1636)5月の
記事 日字档
太宗 第5冊 207頁

左端の文字は euron のようにも見えるが、当時の字体としては oron でもおかしくない。中央のは寧ろ oran に見える。右端の有圏点字は euren であろう。

『滿大遼国史』(1646)に1例のみ見える例(58)は eulen であろう。

(58)



『大遼国史』

bou eulen

(Möllendorff 式 boo eolen)

しかし同じ『大遼国史』でも明らかに o で始まる (59) の単語の例などは (58) の eulen の始めに似ていなくはない。

(59)



ofi obuki oXode 『大遼国史』

『満文三国志』に 6 例有る (60) の例は euren か oren か微妙ではあるが、私は euren としたい。

(60)



2-10b7 50-39a7 17-47a4 17-48a9 17-48b4 19-7a6

『満文金瓶梅』の 91 例は様々であるが、oren とすべきかと思われる。その全例を挙げるのは別の機会にしたいが、少し示すことにしよう。

(61) 『満文金瓶梅』



9-10b1 34-32b1 92-5b7

『満文金瓶梅』は多くの中から無作為に 3 例を挙げたのであるが、(61) 中央の例は euren のような形であるが、左端の例も右端の例も形として oren のように見える。この時代で

はすべて/oren/だったのかも知れない。今後なお検討してみたいと思っている。

初期の vren の例として今西による順治重修『武皇帝実録』(1655)の影印本の全2例を挙げよう。

(62) 順治重修『武皇帝実録』



その後の規範となったと思われる『御製清文鑑』の例(vlen)を(63)に挙げておく。

(63)



『御製清文鑑』

bou vlen

(Möl 式 boo ülen)

7. 句読点(ciq)

次の二種の句読点が用いられている。

(64) ◀ 小さい切れ目

 ▶ 大きい切れ目

筆者は ◀ を「,」で、▶ を「.」で転写しているが、必ずしも前者が読点、後者が句点とは言えない。(65)のような例もある。

(65) xiuwande. guwan-gung, jang-fei be Gaifi 《玄德引關張》(三国志 1-43 才)

玄德が 關公 と 張飛 を 引き連れて





8. 母音字の次の母音字

母音字の直後に来る母音字は i と o/u しかない。母音字の直後では、o と u とを書き分けることが出来ない。筆者は一般に母音字の直後の母音字は i と u で転写し、それより後の音節に母音 o が有る時にだけ、母音調和を考慮して、o で転写する。例えば;

(66) xio/uwande → xiuwande 玄德
 lio/ui → liui 呂
 nio/ungniyaXa → niungniyaXa 鵝鳥

しかし、

nio/ulmon → niolmon	虹
giu/oXoto → gioXoto	乞食
miu/osiXon → miosiXon	邪な

使用頻度の高い動詞・補助動詞 o- の連用形に oume  表記が多いが、これは/o/と/u/の文字の区別の無かった時代の表記の名残かも知れない。無圏点満洲字では、後舌子音の直後以外では、一般的には o/u a/e の区別はなかった。ume と ome はそのままでは区別がつかない。『満文原檔』では、少なくとも ume は vma  と書いてあるのが大部分であるが、oma  の例も少数はある。ome についてはまだ確認が得られていない。有圏点字で o- の連用形 ome が初期に oume  が多いということは、無圏点時代にそのような表記があったことも期待される。

9. 文字上の音節

拗音音節、例えば giya は文字上は 2 音節 gi.ya であるから、ng ts dz k; g; x; 等すべて一子音として、文字上の音節形（音韻論上の音節ではない）は (67) のようになる。満洲語と漢語とに差異はない：

(67) (C) V (V) (C)

しかし、音韻論上の音節は、満洲語と漢語では違いがあり、(68) (69) のようになる。文字上の閉音節は、母音の弱化や無圏点時代の綴り字の残滓などによるものかと考えられる。母音の弱化については早田(2008)参照。

(68) 満洲語の音節構造

$$(C) (y) (w) V \left\{ \begin{array}{c} (i) \\ (u) \end{array} \right\} (n)$$

(69) 漢語の音節構造 (ng はここに限って η で転写する)

$$(C) (y) (w) V \left\{ \begin{array}{c} (i) \\ (u) \\ (n) \\ (\eta) \end{array} \right\}$$

10. 満洲字の転写法の問題

外字以外のローマ字転写の限りでは諸家の転写法に大差はない。初期の Amiot, Gabelentz (の文典 1832) のフランス語式の転写法と Захаровъ (1875), Schmidt, Poppe, 胡(1994)の転写法、さらに池上(1947)の精密転写の提案を除けば、主要な文典・辞書(Gabelentz 1864, Adam 1873, Harlez 1884, Möllendorff 1892, Hauer 1952-1955, Haenisch 1961)に用いられている転写方式は、Möllendorff 式の ū と ʒ に字体の小異はあるものの全く同一と言える。重要な点は、さきにも述べた満洲語で区別されている k/q, g/G, x/X の違いを、これらの転写法

では区別しないで、それぞれ k, g, h にしていることである。さらに、i の語末形でありながら前にスペースを置いて書かれた満洲字（属格-具格標識）と独立形の i（三人称単数主格代名詞・i の音の漢語形態素）は満洲字で明瞭で区別があるのであるが、これを区別せず共に i で転写する方式（Adam 1873, Захаровъ 1875, 1879, Möllendorff 1892, Peters 1940, Hauer 1952-1955, 胡 1994）と、前者を-i で転写する方式とがある。後者には、さらに-i の前にスペースを置かない方式（Gabelentz 1832, 1864, Harlez 1884, Haenisch 1961）とスペースを置く方式とがある。後者の、-i の前にスペースを置く方式は、辞書・文典ではないが、山本謙吾氏の後期の諸論文で実行されている。服部四郎氏は、前期ではハイフンさえ付さなかったが（1943:313（1987:175））、後期（1958（1959:268；1989:71））では明らかにハイフンを付し前にスペースを置いている。山本謙吾氏は、前期の論文（1947, 1954）ではハイフンを付しているが-i の前にスペースは置いている。しかし、後期の論著（1955a,b 以降）では一貫して-i の前にスペースを置いている。i-jeu（Möllendorff 式 I jeo）《義州》のような漢字形態素の繋ぎと区別するためであろう。山本（1955b）の掲載されている同じ本の中で池上二良氏がハイフン無しの i で転写しているのと対照的である（池上 1955）。筆者はこの満洲字の「スペース+語末形 i」を「スペース+ -i」で転写し、スペースを置いた漢字形態素連続は間のスペースの代わりにハイフンを置く。山本謙吾氏の方式に似ているが、筆者は、固有名詞（印欧語一般）・文頭（印欧語一般）・名詞（ドイツ語）・固有形容詞（英語）の初頭字を大文字にする、という欧米の正書法を満洲字の転写には持ち込まない。大文字は、g と区別された G を表す場合、x と区別された X を表す場合、漢語母音 [i] を表すための Y, s の代わりに S、その他必要に応じて原音素（例えば子音として C、母音として V）などを表記するためだけに用いる。

転写方式の選択には以下のような要因が考えられよう。

- (a) 普及度
- (b) 字形に忠実
- (c) 音韻に忠実
- (d) 作業のために便利なフォント——ローマ字はテキストファイル

普及度(a)の点では Möllendorff 式（に代表される方式）がよく行われている。しかし、この方式は満洲語の音韻の区別に対応している文字の違いを大きく無視している、という点で(b)(c)には反している。k/q, g/G, x/X の字と音を区別せず、それぞれ k, g, h とすることによりフォントは簡単になったが、音の区別に係わる研究のためには頗る不都合である。フォントは k', g' 等の「'」は似ているアポストロフィでも代用できるが、長母音でない母音文字 ū を使うのには抵抗を感じる。漢語音節の特別な表記法を別にして、上記の点を改めた「改訂 Möllendorff 方式」と、それ以上に情報処理を含めた作業上の便宜(d)から考えられる方式として筆者の採用している方式(70)を比較してみよう。

(70)	改訂 Möllendorff	筆者の方式
	ū	v
	s	S
	,	;

漢語音節の表記については【3.3.】の所でも一部述べたが、顕著なものとして(71)に示した音節の表記を筆者は用いている。

(71)

Möllendorff	拼音	筆者案
ts'a	ca	t ^s a
dz	zi	dz ^Y
ts	ci	t ^s Y
sy	si	s ^Y
c'y	chi	c;i
jy	zhi	j;i

Möllendorff は拼音の<zi><ci>に母音を書かず、拼音の<si><chi><zhi>に y の母音を書いている。これは当時の漢語の音声を聞いた印象によるものかと思われる。しかし、満洲字の形からすれば、<ci><si>は e の変種の母音が書いてあり、<chi><zhi>は i の母音である。筆者としては母音無しの音節は認めがたいゆえ、(71)のように<zi><ci>には Y を記し、満洲字が i である<chi><zhi>は i を記して c;i, j;i としたいと思う。

漢語音を表す満洲字の転写例を、Möllendorff・Hauer・筆者と並べて(72)に表に示す。

(72) 満洲字	漢語例	現代の拼音	Möllendorff	Hauer 辞典	筆者
𑖇	(科)	k (ke)	k' (k'o)	k' (k'o)	k; (k;o)
𑖇	(高)	g (gao)	g' (g'ao)	g' (g'ao)	g; (g;ao)
𑖇	(蔡)	c (cai)	t ^s ' (t ^s 'ai)	z' (z'ai)	t ^s (t ^s ai)
𑖇	(刺)	ci (ci)	(t ^s)	(z'e)	(t ^s Y)
𑖇 𑖇	(子)	z (zi)	dz (dz)	z (ze)	dz (dzY)
𑖇	(日)	r (ri)	ž (ži)	j (ji)	z; (z;i)
𑖇	(司)	s (si)	sy (sy)	s (<u>se</u>)	s (sY)
𑖇	(尺)	ch (chi)	c' (c'y)	c' (c'i)	c; (c;i)
𑖇	(植)	zh (zhi)	j (jy)	j' (j'i)	j; (j;i)

早田 2008 : 32-33 の(11)とは上述のとおり多少違うことに注意。ここの満洲字は『大清全書』から。『満文三国志』でも、既に述べたように、漢字形態素<子>が dzY と tsY の間をゆれたり（これは母音部分の字形が違うから子音部分の区別が厳密でなくても混同しないが）、<蔡>が tsai と dzai の間をゆれたり、種々の問題がある。機会を得て詳細の報告をしたいと思う。

字形に多様性の有る字と母音に両価性の有る字について表二・表三・表四に示した。

引用文献

- 服部四郎(1943)「國語の周圍」『蒙古とその言語』pp. 289-321, 東京; 「国語の周圍」として補筆して『アルタイ諸言語の研究 II』1987:165-179 に再録。
 ———(1946)『蒙古字入門』東京, 4頁余りの附記をつけて『アルタイ諸言語の研究 II』1987:228-270 に再録。
 ———(1958)「アルタイ諸言語の構造」『コトバの科学1: コトバと人間』221-237; 『日本語の系統』1959:255-274, 東京, に再録; 『アルタイ諸言語の研究 III』1989:56-77, 東京に再再録。
 早田輝洋(2003)「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』第23号, pp.1-10。
 ———(2008)「満洲語の音節構造」『語学教育フォーラム』第16号, pp.21-51。
 胡增益 主編(1994)『新滿漢大詞典』烏魯木齊: 新疆人民出版社。
 池上二良(1947)「満洲字のローマ字轉寫試考」『TÔYÔGO KENKYÛ』Dai 2 go, 1947: 29-49。
 ———(1955)「トゥングース語」『世界言語概説』下巻, 441-488, 東京。
 ———(1999)「満洲字 dz について」『満洲語研究』pp.213-215, 東京。
 今西春秋(1959:64-65)「満語特殊字母の二三について——そのローマ字法の問題」『東方学紀要』I. 天理大学おやさと研究所, pp.52-65。
 ———(1967)「影印〔満文〕大清太祖武皇帝実録」『東方学紀要』II. 天理大学おやさと研究所, pp.173-273。
 松村 潤(2001)『清太祖實録の研究』東北アジア文獻研究叢刊2, 東京
 津曲敏郎(2002)『満洲語入門20講』東京。
 山本謙吾(1947)「有圈點滿文老檔における満洲語文語の研究——中間報告 その一——活用語尾 -kini について」『TÔYÔGO KENKYÛ』DAI 3 GÔ, pp.55-95。
 ———(1954)「意義素假定の一例」『言語研究』25:1-18。
 ———(1955a)「満洲語文語形態論」『世界言語概説』下巻, pp.489-536, 東京。
 ———(Yamamoto, Kengo) (1955b) On the Verb Form in -cina in Script Manchu, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 14, pp.155-167.

Adam, Lucien (1873【同治12年】) *Grammaire de la langue mandchou*, Paris.

Gabelentz, H. Conon de la (1832【道光12年】) *Éléments de la grammaire mandchoue*,

- Altenbourg.
- Gabelentz, Hans Conon von der (1864【同治3年】) *Sse-schu, Schu-king, Schi-king in Mandschuischer Uebersetzung mit einer Mandschu-Deutschen Wörterbuch*, Zweites Heft. Wörterbuch. Leipzig.
- Harlez, C. de (1884【光緒10年】) *Manuel de la langue Mandchoue / Grammaire Anthologie & lexique*, Paris.
- Haenisch, Erich (1961) *Mandschu-Grammatik mit Lesestücken und 23 Texttafeln*, Veb Verlag Enzyklopädie Leipzig
- Hauer, Erich (1952-1955) *Handwörterbuch der Mandschusprache*, Tokyo-Hamburg.
- Möllendorff, P. G. von (1892【光緒18年】) *Manchu Grammar with analysed texts*, Shanghai.
- Peeters, Hermes (1940) Manjurische Grammatik, *Monumenta Serica* Vol. V:349-418.
- Sinor, Denis (1949) La transcription du mandjou, *Journal Asiatique* 1949, pp. 261-272 ; *Essays in Comparative Altaic Linguistics*, (1990) Bloomington, XXVI-XXX に再録。
- Захаровъ, Иванъ (1875【光緒元年】) *Маньчжурско-русскій словарь*, Санктпетербургъ.
- (1879【光緒5年】) *Грамматика маньчжурскаго языка*, Санктпетербургъ.

表 二

CV連続で字形に多様性の少ない子音文字
語末で、子音の一部と母音のすべての形が少し変わる

	┌→	←	←.	←	◄	◄.
	n	a	e	i	o	u
	s	a	e	i	o	u
	š(S)[ʃ]	a	e	i	o	u
	l	a	e	i	o	u
	m	a	e	i	o	u
	c[ç]	a	e	i	o	u
語頭	} j[ɕ]	a	e	i	o	u
語中						
	y[j]	a	e	i	o	u
	r	a	e	i	o	u
	b	a	e	i	o	u
	p	a	e	i	o	u

表 三

CV連続で「子音」字形に多様性の有る文字
語末で母音は少し形が変わる

	┌→	←	←.	←	◄	◄.
	} w f	a	e			
				i	o	u
	f	a	e			

表 四

CV連続で「母音」に両価性の有る文字

			↖	↗
語頭形	ㄅ	ㄅˊ	a	o
語中形	ㄅ	ㄅˊ		
	q	G X [q g χ]		
語頭形	ㄆ	ㄆˊ	e	u
語中形	ㄆ	ㄆˊ		
	k	g x [k g x]		
語頭形	ㄎ	ㄎˊ	a	o
語中形	ㄎ	ㄎˊ		
	k'	g' x' [k' g' x']		
語頭形	ㄊ	ㄊˊ	a	o
語中形	ㄊ	ㄊˊ		
語頭形	ㄊ	ㄊˊ	e	u
語中形	ㄊ	ㄊˊ		

A Manual of the Manchu Script with Dots and Circles

HAYATA Teruhiro

The Mongolian script, which the Manchus adopted in 1599, could not distinguish all the Manchu phonemes. Officially, in 1632, the Manchus revised the script by adding some diacritic marks, namely dots and circles, to eliminate ambiguities of the Mongolian script. This manual deals with this dotted and circled version of the script.

Any grammar book on the Manchu language provides a description of the Manchu script, but always with the assumption that the orthography must have been strictly fixed and have contained no differences, and that the script should be legible, unambiguous, and have no variety. Actually, the Manchu script is full of diversity in its details, often has ambiguities, and sometimes appears illegible, whether in block print texts or manuscripts. I attempt to show a wide variety of specimens of Manchu letters from actual block print sources. A discussion on transcription is added, and my own system of romanization is proposed. The phonology of diphthongs and the syllable structures of Manchu and Chinese are also alluded to.